

受動的代名動詞における未完了性と自発性

Iguchi, Yoko
Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

<https://doi.org/10.15017/9215>

出版情報 : Stella. 26, pp.49-58, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

受動的代名動詞における未完了性と自発性

井 口 容 子

1. はじめに

フランス語の受動的代名動詞は、英語やドイツ語などにおいてみられる「中間構文」に相当するものとみなされることが多い。だが受動的代名動詞の用例を詳細に検討すると、いわゆる「中間構文」とは異なる性格のものがかなりみとめられる。これらを受けて近年、受動的代名動詞に「中間構文型」と「非中間構文型」の2つのタイプを区別すべきではないか、ということが提案されている (Yamada 2002, 林 2004, 井口 2007)。

本稿も基本的にはこの延長上にあるといえるが、興味深い様相を呈するいくつかの実例に特に注目して分析を行なうことで、受動的代名動詞の性格をより明らかにすることをめざすものである。

2. 非具体的概念を表す述語

フランス語の受動的代名動詞には、英語やドイツ語などにおいてみられる「中間構文」とは異なり、事象記述的な性格のものがかなり存在する。

(1) La question *se traite* actuellement à l'Assemblée.

(Zribi-Hertz 1982)

(1) は現在進行中の事象を記述するものである。次の(2)にも同様の事象記述的性格がみとめられる。

(2) L'alliance qui *se cherche* entre Ségolène Royal et François Bayrou est purement tactique : chacun ou chacune embrasse son rival mais c'est pour l'étouffer.

(*Le Nouvel Observateur*, n° 2217, 2007)

動作主にかんしても、(1)(2)の解釈においてみとめられる潜在的な動作主はいずれも不特定多数の人物ではなく、具体的に特定し得る人物である。い

わゆる「中間構文」は、主語名詞句に本質的に備わっている何らかの属性を記述するものであるとされるが、(1)-(2)はそれとはかなり異なる性格を持つものであるといえることができる。

これらの例に含まれる動詞は、いずれも「非具体的 (non-concret)」な概念を表す動詞である。フランス語の受動的代名動詞を考えるうえで、「非具体的概念を表す述語」は重要な意味をもつものであるように思われる。この種の動詞の受動的代名動詞にかんしてしばらく考えてみたい。

フランス語の受動的代名動詞のうち、かなり使用頻度の高いものとして、*s'analyser* や *se justifier* といったものがあげられる。これらは学術論文などのテキストにおいて多用され、いずれも「非具体的概念」を表す述語であるといえる。

(3) *L'intérêt s'analyse* ici comme l'excès de la quantité de monnaie (de Roi George) livrable à terme sur la quantité de monnaie (de Roi George) livrable immédiatement, et le taux d'intérêt comme le pourcentage d'excès de Roi George sur la période.

(Bensimon, G., «Nature de la monnaie et taux d'intérêt spécifique chez Keynes», version provisoire)

(4) Ce choix d'une définition nationale du seuil des bas salaires *se justifie* notamment par la diversité des conditions institutionnelles (existence ou non d'un salaire minimum, caractéristiques de la négociation salariale, instruments et orientation des politiques d'emploi) et structurelles (comportements d'activité de certains groupes de population, diffusion de l'emploi à temps partiel, structures de l'activité économique et des qualifications, etc.) des marchés du travail dans les différents pays.

(Ponthieux, S. & P. Concialdi, «Bas salaires et travailleurs pauvres : une comparaison entre la France et les États-Unis»)¹⁾

これらの用法にみられる代名動詞は、「属性記述」であるのか、それとも「事象記述」であるのか、一義的には判断しがたいところがある。(3)は「ここでは「*intérêt*」は以下のようなものとして分析される。」と解釈すれば「事象記述文」といえるだろう。(4)の *se justifier* も同様の淡々と記述する解釈をもっ

てすれば「事象記述文」といえるだろうが、他方において「正当化され得る」という「可能」のモダリティを含ませれば、「属性記述文」とも考えられる。次の(5)においては、主語が *cette phrase* という具体的な指示対象を持つ名詞句であるため、その属性を記述するという性格がさらに強くなる。

(5) *Cette phrase s'analyse de la manière suivante.*

これらの受動的代名動詞は、英語においては次のような、動作主補語を伴わない、迂言的受動文に対応するものであるといえるだろう。

(6) *This sentence is analyzed in the following manner.*

少なくとも、*This book reads easily.* といった文に代表される、狭義の「中間構文」とは性格を異にするものである。

学術論文に代表されるような客観性を要求される文脈においては、不特定多数の動作主を含意し、一般的に真である（もしくはそれに準ずる）ことを表す、総称的（generic）性格を持つ文が多用される。英語においては、(6) のような動作主を明示しない受動文がこの任に当たる。「誰かが」恣意的に「分析する」のではなく、「誰がやろうと、このような形で分析される」のである。

一方フランス語は、受動の形式として迂言的受動文の外に受動的代名動詞を有する。このうち受動的代名動詞は、アスペクト的な「未完了性」、および「動作主の非明示」というふたつの特性により、上記のような文体的要求を満たすのに最適の形式といえるのである。次節以降、この2点にかんしてさらに掘り下げて考えていく。

3. 受動的代名動詞と未完了性

受動的代名動詞が点括相とは共起しないという「アスペクト制約」を有することはよく知られている。

(7) a. *Cette chemise se lave facilement.*

b. **Cette chemise s'est lavée hier matin.*

従来、この制約は受動的代名動詞の「属性記述的」な性格から導き出される二次的なものと考えられることが多かった。だがこれは逆ではないだろうか。受動的代名動詞はアスペクト的に未完了に限定されており、かつ5節で述べる理由により動作主を明示しないという特性をもつものであるため、属性記述文の事例が多くなるのである。その中には(7a)のような中間構文としての意味を

持つものも、Le vin blanc se boit frais. といった文に代表される、井口 (2007) において「未完了受動型」と呼んだ、規範を表すタイプのものも含まれる。

だがフランス語の受動的代名動詞は必ずしも属性記述文ばかりではない。先にみた (1) (2) は事象記述文であるし、(3) (4) の解釈にかんしては微妙なところがある。これらはいずれもアスペクトの点からいえば未完了である。

さらに受動的代名動詞は、その「未完了性」により、次の (8) にみられるような「習慣的事象」の記述にも用いられることになる。

(8) Ils savent souvent mieux que le propriétaire initial ce qui se *porte* en ce moment (combien de poches ? quelles parties doivent être délavées ?). Les jeunes gens à Dar es-Salaam s'y connaissent autant en matière de mode que les jeunes Américains.

彼等はしばしば、もとの所有者以上に、今、何が着られているのか (今、何が流行っているのか) よく知っている (ポケットの数は? どの部分をブリーチアウトしたらいい?)。ダル・エス・サラームの若者たちは、アメリカの若者に負けず劣らず、流行に通じている。

(*Le Nouvel Observateur*, n° 2219, 2007)

リサイクルされたジーンズを話題とする文章から引用したものである。ここにおける *se porter* は主語の属性を記述するものとは考えられない。さらにこの動詞は、*s'analyser*, *se justifier* などのような抽象的な概念を表すものではなく、より具体的、日常的な語彙である。「何が今、(一般に人々によって) 着られているのか」という、習慣的事象を記述するものであるといえる。

次の 2 例も、習慣・反復的に行われている、もしくは行われた事象を述べるものといえるだろう。

(9) Les livres *se vendent* bien cette année.

(山田 1997)

(10) Le noir *se portait* beaucoup cet hiver.

(Wagner & Pinchon 1962)

4. 迂言的受動文との競合

それではなぜ、受動的代名動詞は未完了相に限定されるのか。筆者はこれは迂言的受動文との競合によるものであると考える。完了動詞の場合、動作主補語を伴わない迂言的受動文においては、動作受動としての解釈よりも、動作の結果としての状態を表す解釈が優勢となることはしばしば指摘されるところである (Lamiroy 1993 等)。完了的性格にかたよる迂言的受動文の機能的間隙を埋める形で、未完了的性格の受動的代名動詞が発達したと考えられるのである²⁾。Brunot (1967) はフランス語の迂言的受動形の、このような意味における不完全さが、受動的代名動詞の有用性につながったことを示唆している (p. 434)。

興味深いことに、スラブ語派の言語における受動的中相においても同様の傾向がみとめられる。顕著なのはロシア語である。スラブ語派の言語が、動詞に「完了体 / 未完了体」の区別を設けるものであることはよく知られているが、ロシア語においては迂言的受動文の適用は完了体動詞に限られている。未完了体動詞の受動は接尾辞 *-ся* を付した再帰受動 (受動的中相) の形態をとるのである。

(11) 完了体動詞

- a. Oleg otkryl kalitku.
 Oleg : NOM opened : PERF gate : ACC
 'Oleg opened the gate.'
- b. Kalitka byla otkryta Olegom. <迂言的受動>
 gate : NOM was open : P.PART Oleg : INSTR
 'The gate was opened by Oleg.'
- c. *Kalitka otkrylas' Olegom. <再帰受動>

(12) 未完了体動詞

- a. Oleg otkryval kalitku.
 Oleg : NOM opened : IMPERF gate : ACC
 'Oleg was opening the gate.'
- b. Kalitka otkryvalas' Olegom. <再帰受動>
 gate : NOM opened : IMPERF:REFL Oleg : INSTR
 'The gate was being opened by Oleg.'

c. *Kalitka byla otkryvana Olegom. 〈迂言的受動〉

(以上, Babby & Brecht 1975)

(12b) にみられるように、ロシア語の再帰受動は造格 (具格 instrumental) による動作主補語をとることができる。これは、Siewierska (1988: 267) が指摘するように、不完了体動詞にとっては再帰受動が唯一の受動化手段であることと密接に関係するものと思われる。ロシア語の受動的中相は、不完了体動詞に対して、ほぼ完璧な「受動」の機能を果たしていると考えられるのである。ロシア語の再帰受動は、中相範疇の機能拡張が最も進行したタイプのひとつとして知られているが、それにはこのようなアスペクト的要因が重要な役割を果たしているのである。

ロシア語においても、再帰受動文/迂言的受動文と、未完了/完了というアスペクト特性の間にこのような密接な関係がみとめられるということは、この現象の普遍性を考える上で、非常に興味深いことであるといえる。

5. 動作主の非明示

受動的代名動詞は、迂言的受動文とは異なり、動作主を明示することができないという制約をもつ。

(13) *Ce livre se lit *par Paul*.

この現象は、中相範疇機能拡張におけるひとつ前の段階である「自発的中相 (中立的代名動詞)」の、「自動詞的構造」をひきついだものであると考えることができる。受動的代名動詞は、中立的代名動詞とは異なり、行為を行う主体すなわち動作主の存在を含意している。「読む人」なくして「本を読む」という事象は成立し得ない。しかしながらそれを明示することはできないのである。意味的には二項的であるが、統語的には自動詞に近い形になっているのである。

そしてこの明示されない動作主は、「量化」によって解釈されることになる。事例によって「全称量化」、もしくはそれに準ずるものとみなしうる場合と、「存在量化」の場合があると考えられるが、いずれのタイプの量化によるものかという点についての詳細な分析は他の機会に譲りたい。ここでは次のことを指摘するとどめておく。具体的な動作の仕手を示さず、「大多数の人々によって」あるいは「そのように行う人が複数存在する」という解釈を与えられるこ

とにより、この構文は、一方において *Le vin blanc se boit frais.* のような属性記述文として機能することになるし、また他方において *Cette phrase s'analyse de la manière suivante. [= (5)]* という文にみられるような、著者の主観的判断としてではなく、客観的事実として事態を提示するという文体的効果をもつ記述を行うことが可能となる。

この動作主の量化による解釈と、3節・4節において指摘した未完了性とが相俟って、このような効果を生み出していることはいうまでもない。

6. 受動的代名動詞の「自発性」

ところで「非具体的 (non-concret)」な概念を表す動詞の場合、受動的代名動詞の「アスペクト制約」が解除され得るということが、Boons, Guillet et Leclère (1976) らによって指摘されている。

(14) *La question s'est discutée hier matin avec passion dans la salle de conseil.*

(Boons, Guillet et Leclère 1976 : 132)

Zribi-Hertz (1982) はこのタイプの例を多数あげている。

- (15) a. *Le verdict s'est rendu hier soir.*
 b. *Ce point s'est soulevé hier à la réunion.*
 c. *Le crime s'est commis hier matin.*
 d. *L'opération s'est effectuée hier.*
 e. *La décision s'est prise hier soir.*
 f. *L'affaire s'est arrêtée / réglée / conclue hier soir.*

(以上, Zribi-Hertz 1982)

これは一見パラドクサルな現象であるかのようにみえる。非具体的、抽象的な概念を表す述語は、論述文などに多用されるというその文体的傾向から、総称的な記述に用いられることが多く、「未完了性」をその本質とする受動的代名動詞と相性のよいものであった。ところがまさにその「非具体的概念を表す述語」において、アスペクト制約が解除された用例が多々みられるというのである。

この現象は、受動的代名動詞のもうひとつの本質的特性ともいえる、「動作主の非明示」に由来する「自発性」と、関連付けて考えることができる。5節において、明示されない動作主は「量化」によって解釈される、ということのみ

てきた。これは「動作主の背景化」の現象であるということが出来る。さて(14)–(15)であるが、これらの文においては「動作主の背景化」がさらに徹底しており、あたかも出来事が自然発生的に生じたかのような記述がなされているのである。

春木(1996)はこれらの例の主語名詞句が, *décision*, *crime*, *verdict*, *opération* 等、「過程」を含意しているものが多いことを指摘し、これらの発話は「行為を現象として述べ」ているものであるとする。さらに春木は「行為というのは、行為者(動作主)と行為の対象物によって成立するのに対し、過程というのは行為名詞による名詞化のようなもので、たとえ行為者が必要な行為であろうと、行為者はその中に取り込まれているのである」(p.180)という興味深い指摘をしている。

このように考えてくると、(14)–(15)のタイプの例は、ドイツ語の(16)のような文にみられる「非人称受動文」に機能的に類似していると思われる。(16) *Es wurde getanzt.*

‘*On a dansé.*’

「人」が行った動作として捉えるのではなく、事象を事象として捉える。誰が行った動作であるのかということは視野の外に置き、ただ出来事が生じたことを述べる文なのである。

尾上(2003)は日本語のラレル文に代表される「出来文」にかんして、ひとつの状況を「モノの運動」として捉えるのではなく、「場における事態全体の生起」として捉えるものであるとする。個体中心の「モノ-モノ」間関係の認識を基盤として成り立つ捉え方ではなく、「場-コト」関係の上に成り立つ捉え方であるとするのである(p.41)。フランス語の(14)–(15)のような文には、これに近いものを感じる。

以上の考察をまとめると、次のようにいうことができる。受動的代名動詞は、迂言的受動文との競合により、「未完了」アスペクトに限定される。ただこの制約が緩められる場合がある。それは文の他動性を低下させ、あたかも自然発生的に生じた出来事であるかのように示したいという表現欲求がある場合である。客観性が求められる学術論文、あるいは報道文などにこのような状況はよくみとめられる。「自発的中相」としての中立的代名動詞から拡張されたものである受動的代名動詞は、動作主の存在を含意しながらも、明示することを許さ

ない。その点において、迂言的受動文に比べて「自動詞的性格」を強くもっているといえる。このような特性を持つ受動的代名動詞は、上記の表現欲求にこたえうる形式であり、そのため未完了性を犠牲にしてもそれに従う、といった事例が出てくるのである。

7. 結 語

フランス語の受動的代名動詞は、アスペクト的な「未完了性」と「動作主の非明示」のふたつを、その最も重要な特徴とする受動形式であるといえる。Ce livre se lit facilement. や Le vin blanc se boit frais. のような「属性記述文」の例が多いのは、それを反映したものである。

事象記述的性格をもつ例においてもこの2つは保たれている。これは一方において、学術論文などの客観性を求められるテキストにおいて多用される結果を招き、他方においては(8)–(10)のような習慣的事象記述文につながっていくのである。

註

- 1) 例文(3)(4)はいずれもインターネットのGoogle Scholar (<http://scholar.google.co.jp>)により検索したものである。
- 2) この点にかんしては井口(2005)に詳述しているので参照されたい。

参考文献：

- Babby, L. H. & R. D. Brecht (1975) : «The Syntax of Voice in Russian», *Language* 51, 342-367.
- Boons, J.-P., Guillet, A., Leclère, C. (1976) : *La structure des phrases simples en français : constructions intransitives*, Droz, Genève.
- Brunot, F. (1967) : *Histoire de la langue française*, tome 2, Armand Colin, Paris.
- 春木仁孝(1996) : 「現代フランス語の再帰構文再考——意味解釈の仕組みとモダリティ——」, 『言語文化研究』22 (大阪大学言語文化部), 171-194.
- 林博司(2004) : 「フランス語の中間構文と代名動詞構文」, 『日本語の分析と言語類型——柴谷方良教授還暦記念論文集——』, くろしお出版, 337-356.
- 井口容子(2005) : 「受動的代名動詞再考——叙述の類型とアスペクト——」, 『フランス文学』25 (日本フランス語フランス文学会中国四国支部), 1-11.

- 井口容子 (2007) : 「代名動詞の意味・機能的ネットワーク——自発, 受動, 非人称——」, 『フランス語学研究』 41 (日本フランス語学会), 31-44.
- Lamiroy, B. (1993) : «Pourquoi il y a deux passifs», *Langages* 109, 53-72.
- 尾上圭介 (2003) : 「ラレル文の多義性と主語」, 『言語』 32-4, 大修館書店, 34-41.
- Siewierska, A. (1988) : «The Passive in Slavic», M. Shibatani (ed), *Passive and Voice*, John Benjamins, 243-289.
- Wagner, R.-L. & J. Pinchon (1962) : *Grammaire du français classique et moderne*, Paris, Hachette.
- 山田博志 (1997) : 「中間構文について——フランス語を中心に——」, 筑波大学現代言語学研究会『ヴォイスに関する比較言語学的研究』, 三修社, 97-131.
- Yamada, H. (2002) : «Sur les deux types de la construction du verbe pronominal passif – la valeur normative et la restriction sur les éléments adverbiaux –», *Études de langue et littérature françaises*, 80, 208-221.
- Zribi-Hertz, A. (1982) : «La construction “se-moyen” du français et son statut dans le triangle : moyen-passif-réfléchi», *Linguisticae Investigationes* 6-2, 344-401.